

訪中記

池田魯参 石井修道 伊藤隆寿

私たち、鎌田茂雄先生を団長とする「日

中友好中国文化研究者訪中団」の一員として、一九八〇年の六月一日から六月十四日の二週間にわたって、上海市・江西省・浙江省

・江蘇省の各地を訪れた。行程を簡略に示す

〔一日〕成田から上海へ飛び、黃浦公園や上海市工芸品展鎖会を訪ねた。

〔二日〕上海から南昌へ飛び、午后、南昌から廬山に行き、廬山東林寺・慧遠墓塔・西林寺塔を訪ね、九江市に出て市の南方十里鋪から左折して二・五キロメートルほどの場所にある周濂溪の墓陵を訪ね、九江市内の甘棠湖・能仁寺址を訪れた。

〔三日〕午前中は、廬山の花径を訪ね、次いで天橋・錦綢谷・觀妙亭（竹林寺址）・仙人洞（仏手岩）・御碑亭をみ、午后は、五老峰に登り、五峰のうち三峰の頂上を窮めた。

次いで植物園・望鄱亭を訪ねた。

〔四日〕午前は博物館・大天池（円仏殿）・天池寺塔天心台（文殊台）・天池寺址）を訪ね、午后は、望江亭・白鹿洞書院・点將台・愛蓮池・帰宗寺址・溫泉工人療養院を訪ね、秀峰寺址にある秀峰賓館に泊った。

〔五日〕午前、秀峰寺址を參観し、双劍峰・香爐峰等を望見した後、廬山に別れ南昌に着いた。午后は、南昌博物館・八大山人書画陳列館を訪ね、南昌から夜行列車で、翌六日の早朝、杭州に着いた。

〔六日〕午前は、杭州から紹興・嵊県を経て、正午すぎには、天台山國清寺に着いた。午后は國清寺を參観した。

〔七日〕夜の明けぬ三時から、國清寺の朝課を參観し、朝食后、真覚寺・石梁・下方広寺址を訪ね、午后は、天台山を発ち、寧海を経て、南溪温泉で泊った。

〔八日〕午前は、寧波市に着き天封塔をみ、その後、太白山天童寺を參観し、天童寺で昼食をとった後、鎮麟塔・阿育王寺を見し、寧波、紹興を経て、杭州に着いた。
〔九日〕午前、飛來峰靈隱寺・玉泉寺公園・寶石山黃立洞・岳飛廟を訪ね、午后は西湖の遊覽をし、六和塔を訪ね、淨慈寺を車窓から望見し、吳山を訪ねた。

〔一〇日〕杭州から上海を経て、南京に着いたのは、夕方。夕食後、歌劇「金孔雀」を観劇した。

〔一一日〕午前、明故宮址・明孝陵・永樂帝碑・吳孫權墓陵・中山陵・靈谷寺址（三絕碑・靈谷塔）・鶴鳴寺址を訪ねた後、玄武湖畔から、台城・鶴鳴山・北極閣を望見した。午后は、清涼山清涼寺址を訪ね、次いで莫愁湖公園・孔子廟址・貢院址を訪ね、雨花台・棲霞山棲霞寺・梁墓を參観した。

〔一二日〕午前は、南京を発ち蘇州に向かい、午后は、虎丘雲巖寺・寒山寺・留園を參観し、未公開の双塔を車窓から望見した。
〔一三日〕午前、網師園・北寺塔を訪ね、蘇州を発つて上海に着いた。午后、竜華寺を訪ね寺塔を參観し、その後は、朵雲軒・新華書店・古籍書店などをのぞき、夜は上海芸術

劇場で雑技を観た。」

「一四日」午前、上海を発ち、大阪には、午後二時に着いた。

学部からは、石井修道、伊藤隆寿の両氏と私が、この訪中団に参加したので、執筆を分担し、特に仏教史蹟を中心に、現況を報告しておきたい。

最後に、中国国際旅行社上海分社の費錦氏、劉書勤氏には、全旅程のお世話を頂いた。上

海では陳燕莉氏（女）、南昌・九江・廬山、星子では、黃明亮氏、鮑建梅氏（女）、顏運華氏、杭州・天台山・天童山では、馬安東氏、馮黎明氏、南京では、王幸夫氏、蘇州では、朱長海氏のお世話になった。私たちの史蹟探訪の旅が、ともかくも一応の成果を収めることができたのは、各地で頂いた工作員の方々の御労苦のおかげであり、衷心より感謝申し上げたい。

虎渓の手前には、上流にそって数戸の農家があり、一人の青年は、この辺を東林街といふと告げた。定めし門前街であろう。数羽のひな鶏が、よちよちと、私たちの間を右に左にかけぬける。

廬山・天台山巡礼行

池田魯參

上海に一泊した翌日、七時五五分発の便で虹橋空航から南昌へ飛び、向塘空航には一〇時一五分に着陸した。江西賓館の食堂で昼食

映える、白い西林寺塔と、赤い東林寺の屏を緑の木立ちの間にみつけた。

廬山に向かって南面をとり、バスに乗って北の方、廬山に向けて発った。

新緑にもえる山脈を望み、人民公社員が一群になつて田の草をとる、そういう田園風景のなかを、およそ二〇〇キロメートルの道のりをひた走り、夕暮れ近い六時頃、残照に

「東林寺」は、廬山の山魁に向かって南面し、廬山の一支部が平地に突き出して切れる山の端を背に、その下を迂回する道路をはさんで、西林寺と並んで、平地に建つ、小ぢんまりとまとまつた寺であつた。寺の門前には数町歩の水田が広がつてゐる。東林寺に至る参道は三、四メートル幅の、山門までは百メ

トルはあらうか、乾いた白い道が真直ぐに通つてゐる。その入り口に、何の変てつもない石造りの橋があり、その下を「虎渓」が流れれる。陳舜俞が著わした『廬山記』に（一〇七二）に、「流泉、寺を匝り下つて虎渓に入ることができたのは、各地で頂いた工作員の方々の御労苦のおかげであり、衷心より感謝申しあげたい。

「山門」を入り、「敕賜東林寺」の額がある、いわゆる「弥勒殿」を通り、その奥に「神運宝殿」の額がある「仏殿」で焼香をした。寺僧が低く梵鐘を打つ。仏殿の右どなりには、「三笑堂」と「念佛堂」が並び、念佛

堂の前にある池は、あるいは謝靈運が掘った「白蓮池」であろうか。（但し『記』には、「神運殿の後に白蓮池有り」とある）。池の辺には楓の老木があつて、根廻いには、現住の「東林夢遊比丘、果一立石」と記す「廬山東林寺六朝松記」なる碑刻があつた。

仏殿の左隣にある「客堂」で、果一和尚から数分ほど説明を受けた。それによると、現在は一一名の僧が住んでおり、六八歳を最年長にして、最年少は二四歳である。日常は『淨土課誦本』（実際にみせてもらつた経本には『仏教念誦集』とあつた）を誦誦するといふ。『瑜伽焰光』を修することがあるが、という団長の問い合わせに対して、人民のために営むことがある、との答えが即座に返つた。旧中國の仏教儀礼が、今日では新しい意味を荷負つて復興しつつあるのであらうか。

傍らにいた僧に、密かに用意して来た調査表に記入を依頼したところ、大変に失礼ではあるが、書かれた文字はたどたどしい。現今の中中国的仏教寺院に居住する一般的な僧侶たちは、恐らく教学の研参などの余裕はなく、生産労働に従うことを急務としているのであらう。境内の空地を利用した蔬菜畑の畝には雑草は一本もなく、よく手が入つていたのが

それにつけて印象的であった。

東林寺の山門を出て右方に水田のなかの小径を抜け、大路に出てから、西林寺塔の方に向かって百歩ほども歩くと、右側の小高い丘に「慧遠凝寂の塔」がある。凡そ六〇年前の常盤大定博士の報告を参照してみると、四人組時代に破壊されたということもあるが、近年になってコンクリートで修復された跡が痛々しい。「晋遠公祖師塔」と刻する標石の前に立つと、「西林寺塔」は眼の高さにあり、夕空の薄明を背に、黒々と屹立している。

この間、わずかに一時間ばかりの参観であったが、初めて東林寺を訪れた私たちの感慨はそれぞれに深く重かった。

九江市に着いた時は、すでに墨色の闇の中である。南の方角にある十里鋪から左折し、「周濂溪の陵墓」を探しめてた時は、時計はすでに七時三〇分を回っていた。土地の人案内でも、水田の畦道をつたつていくと、バスを降りた地点から、五〇メートルほどの距離にその場所はあつた。これも又四人組が破壊した跡だという。墓碑などの一片の証拠すら眼にすることはできない。しかし夜目にも、松木立が陵の頂きをなだらかに包み、相当の墓址であることが知られる。辺りに蟹が群れ

飛び、洩光がひとしお怪しく私たちの慕古の氣分を誘う。一帯の住民は、今でもほとんどは周氏であるという。

九江市内に戻つて、甘棠湖（湖中に煙水亭がある）を望み、「能仁寺」の額がかかる山門を入つて、がらんとして何もない「能仁寺址」に立つた。高い白土屏の向うに、街の灯影を映す「能仁寺塔」を遙拝することができた。

この日の宿所となる廬山山中の廬林賓館に到着したのは、すでに一〇時二〇分をすぎた夜更けである。私たちは直に夕食をとり空腹をいやした。

翌三日、最初訪れた「花徑公園」は、入り口に「花開山寺」「詠留詩人」と刻むように、白楽天が詠んだ、「大林寺詩」に因む。「人間四月芳菲尽く、山寺の桃花始めて盛んに開く、長恨す春帰りて覗むるに處無きことを知らず、転じて此の中に入り来るとは」と。九月頃、東林寺では扇をつかうほどの残暑があるので、翌日、大林寺に来てみると、流泉が氷結しているありさま。廬山の下と上とではこれほどに違うのであるから、白楽天の表現は誇張ではない、と陳舜俞も肯う。次いで、当時の寺の住僧は、皆、海東の人であったといつてゐる。しかし今日ここに遊ぶ人たちの

表情は、寺の址であることさえも忘れているかのようである。

次いで、「花径」の向いの入り口から下りて、「天橋」「錦綱谷」「観妙亭」「竹林寺」

「仙人洞」「御碑亭」という順で険峻な山道伝いに参觀した。一九七九年三月、南昌の江西人民出版社から出版された『廬山导游』と

いう観光案内書、などでは、もっぱらこの辺は明の太祖朱元璋と周顥仙人の事蹟で説明される。殊に「御碑亭」は、周顥仙を祠る一三九三年に建てられた碑を収める碑楼である。

「仙人洞」は、呂洞賓が「修道成仙」した場所といわれ、洞窟の天井を成している、その岩盤が突き出る天然の造形が五本の指に似ることから又の名を「仏手岩」と呼ぶ。陳舜

俞は「百衆を容る可し」と紹介しているが、南唐の元宗の時、僧行因が、三〇年間もこの

巖窟に住し、『華嚴別論』一〇巻を製した、と伝える記事は見落してはならないだろう。

「五老峰」の登攀は、実に爽快であった。

五老峰は海拔一、四三六メートルの峰であるが、山中の街がすでに一、一六七メートルの高所にあって、それから登峰口までバスでまた結構登つから、私たちが実際に登った高さは、一〇〇メートルもないはずなのである

が、峰峰の頂きに立ってみれば、眼下は壁立万仞。鄱陽湖が一望千里のうちに見渡せた。翌日はこの峰をふもの道から仰ぎみることになるのである。

四日に訪ねた「大天池」には「天池寺」の址があるが、本殿跡の礎石と、「天池寺」と刻む石門がその所在を今日に伝えるが、急坂の参道もふもとに向かって雜草におおわれ途中で消えている。「天池寺」址の西にある「文殊台」は、五台山から廬山に來た文殊菩薩に因む、「朝天拜日」の台であるが、陳舜俞によると、廬山に「文殊の像ありと伝うること旧し」とい、文殊の靈場として廬山は五台山に劣るものではないという。

「帰宗寺」址は、晋の咸康六年（三四〇）江州刺史の王羲之が、那連耶舎（仏駄耶舎？）を住せしめた寺で、王羲之に因む「洗墨池」

がある。八二五年頃は馬祖の弟子の智常が禅刹として有名にした。世に「赤眼帰宗」と呼ばれ、白鹿洞書院の創設者の李渤と親交があつた。しかし今日は「河西共産主義労働大学

星子分校社」に変わり、寺のあとかたはない。校舎前の樟樹の根かたには、あかくさびついた梵鐘が、夕陽に口を開けて、無難作に転がっていた。「墨池」は中庭にあり、裏山

には「右軍鷺池」と刻する景勝な山水がある。溪流は銀色に泡立ち、石上を伝うようになれて落ちていた。

この夜泊つた秀峰賓館は、「秀峰寺」（開先寺）の址である。鶴鳴峰の下にあり、「山南

の絶致」という陳舜俞の言は今も変わらない。

梁の昭明大師が隠棲したところと伝え、南唐の元宗が書堂を造り、即位した後、保大の年に伽藍とし「開先寺」と号んだ。賓館の庭前を流れ下る水は澄んでいて水量も多く、澗

中の岩石は雲母を含んでいるとい。『望廬山瀑布詩』で李白が「飛流直下三千丈、疑う

らくは是れ銀河の九天より落るか」と詠んだ

瀑布は、鶴鳴峰と双剣峰の間にあり、一条の白練りの帶となつて、樹間に張りついている

かとみえた。双剣峰の西どなりに香爐峰が連なる。

私たちには、丸三日を費やして、廬山の頂を究め、山下を一巡したことになる。盛り沢山な旅程を詳細に記述するには、残念ながら紙数の余裕がない。

五日午后、四時五五分発の列車に乗つて、六日の早朝、五時四五分に、杭州駅に着いた。およそ一三時間の夜行列車の旅である。杭州駅前から直ちに二台のバスに分乗し、錢塘江

を渡り、六和塔に別れをつげ、会稽山を南方に望見する紹興で朝食をとり、上虞、嵊縣を経て、天台山に向かった。天台山行きの北側からのルートとしては、私たちがとったコースは歴史的にも主要な幹線で、例えば、成尋の『參天台五台山記』などの例にみても、曹娥江を舟でいき、新昌県で下りて天台に向かっている。南側からのルートは、円珍などの例のように、臨海（台州）から始豐溪を舟で北上して天台に到るものであった。現代の旅は舟がバスに変わっただけで、眼に映る風景や、文化的刺激は量においては彼ら求法僧のものと、同じでなければならない。

いくつもの嶺を越え、赤城山塔を望んだのは正午頃である。「石を積みて、石色艶然と朝霞の如」くで「雉堞」のようであるから、「焼山」とも呼ばれる。天台智顕が示寂した故地である。又、灌頂が著作活動を展開した「丹丘」であり、「結集巖」があるはずであり、湛然の「釈籤巖」もあるはずであるが、今回はここまで行けない。

さらに二〇分ほども北に入ると「国清寺」の九層の「隋塔」が赤茶色にみえる。徐靈府が撰する『天台山記』（八〇六～八二〇）によると、「長松、皆道を夾んで寺に至る」と

あるが、やがて天童山でみるような老松の並木は、今はることはできない。「七仏塔」の背後にある、「唐一行禪師之塔」の墓陵にわずかに「長松」のなごりらしきものをとどめているにすぎない。「隋塔」の辺には松の若木が植林されきれいに下刈りされていた。

「国清寺」は、八桂峰（正北）、映霞峰（西北）、靈芝峰（西南）、靈禽峰（東北）、祥雲峰（東南）の「五峰」の下にあり、円珍などは、「五峰」の名を「国清寺」の代名詞として使う。正面の豊干橋を渡ると、正面に「照壁」があり、「隋代古刹」と大書してある。

東向きにある「国清講寺」の額のある門を入り、孟宗竹の竹叢を両側にわけて、朱色の低い土屏は、真直ぐに「国清寺」の額をかける「弥勒殿」へと導く。「示歎喜相」を示す布袋様の弥勒を祠り、裏に韋馱天を祠るのは、中国の一般の寺院と同じであるが、韋馱天像の造り方が異なる。剣を横にし、合掌した母指の間にたばさむスタイルは、ちょっと他に例をみない。又、両側に一対の金剛力士像が向きて置かれているが、これも四天王を四隅に配する一般的な様式と異なる。

次に「雨花殿」がある。この殿の、四隅に四天王像がまつられている。殿の真中には香

爐がすえられているだけである。

石階を登ったところに庭があり、一対の樟樹と一対の柏樹の老木が植えられ、更に一段と高い石階を登ると「大雄寶殿」があり、右から左へ四聯がかけられている。「消災延寿藥師如來」「娑婆教主釈迦文佛」「千花台上盧舍那佛」「西方接引阿彌陀佛」と記す。殿内に入ると釈迦佛の立像をはさんで、右に迦葉

像、左に阿難像がすえられ、右に鐘、左に太鼓が置かれるのは、鐘樓、鼓樓の配置と同列である。前机の前には、香爐を中心にして、赤色のローソクを刺した、蠟燭立てが四基、

対をなして並んでいる。因みに蠟燭は山内の自家製品である。さらに東西両側には、九体づつの十八羅漢が並び、右側の背面には正面

を向いて文殊像が、左側には普賢像が祠られている。本尊が背にする壁の裏面には、鰲に乗った「慈航普度」観音像の大レリーフがある。善財童子と竜女を両わきに伴っている。

この図様は、天童寺でも靈隱寺でも棲霞寺でもみられた。「慈航者」とか「漂海」と呼ぶ、觀音像のイメージは、恐らく海洋からほど遠くない場所にあるこれらの寺々が、航海の安全を守る菩薩として、あるいは海難事故でみかかった精靈を慰めるために、海神の菩薩と

して観音像を祠り、一般の人々の根強い信仰を集めている証しであろう。

大雄宝殿の左側には「妙法堂」があり、上階は「藏經閣」になっている。堂内に入ると正面に「台宗講席」の額が掲げられ、その壁面を背に智顕像の軸と、彫像が祠られ、その石造の壇上には、机と椅子がすえられ、机の上には一つの坐仏がおかれている。石壇の下には前机があり、その前にさらに四方形の机があつて、真中にいま一つの坐仏がおかれて、その前に香爐と灯明台の三具がおかれている。何かもの足りない感じを受けるのは、生花の類を飾ることが少いせいであろう。前門の両隣から両側の壁面にそつて、いわゆる「長連牀」がおかれている。一人の青年僧は、その上で、坐禅を組んでみせてくれた。

ここで講義が行なわれていることは、石壇に向き合って両側に机と椅子が整然と並べられてあつたから疑いないが、坐禅なども実際に行なわれることがあるのであろう。「台宗講席」とある壁の裏面には、一幅の「極樂国」と称する靈鷲山マンダラ図がかけられていた。

現住は、六一歳になる唯覚和尚である。あいにく出張中とのことであつたが、浙江省政

協常任委員、全国政協委員を兼ねる高僧である。現在六五名の僧がおり、七九歳を最年長として一九歳の青年僧までを含むという。またま「聚賢堂」の額をかける「斎堂」の前面の左壁に名單をみつけた。一の僧名を記せないが、数えたところ、公務二三名、会化七八名、牽牛一名、東辺管水一名、管山八名、厨房四名、庫房四名、養猪一名、養兔一名、牽牛一名、郎中門拥反如〇名、請假四名とあり、五六名が確認できる。

『心經』『楞嚴咒』『阿弥陀經』などを読誦し、『法華經』は研究はするが、普通、念誦することはないという。『瑜伽燄光』などは今は行わないという。生産面では、僧侶も人民公社国清寺生産大隊のなかに属し、公社員として、二〇〇ヘクタールの田畠で、米、麦、山椒などを栽培するが、宗教活動の面では独立している(?)ということであった。

七日午前中は、国清寺から天台山の山道をゆられながら三〇分ほど登り、「真覚寺」を訪ねた。昨夜半から降り出した雨が、一段と雨足を強め、周囲の山脈は雨霧のなかに閉ざされ、視界はわずかばかりの距離である。智顕の遺体が葬られた寺で、山門には「智者塔院」の額がかかげられ、「登峰始識天台寺」

なく、「下方広寺」は修理計画中である（石橋瀑布と並んであり、翌日修理現場を見ることができた）。「万年寺」はなく址だけがある、（石橋への下り口に近く万年寺址の方向を示す標石があった）という答えであった。

「方丈樓」は「斎堂」の裏、「迎塔樓」の前にある。「説法堂」の額がかかり、堂内は応接室として使われているようであるが、智者大師像を中心四幅の書がかけられている。右から「宗依法華判釈五時八教」「千年古刹永承衣鉢」「昔日靈山同聴法華」「行在止觀總持百界千如」とある。雄勁な墨痕である。おととしに描かれたもので、中国人民美術出版社長の邵宇氏の手になつたということであった。

この夜、杜鵑がしきりに鳴いた。

夕食前に宿舎である「迎塔樓」のロビーで、天台山国清寺文管会の齊名治氏をつかまえ、常盤博士の『史蹟解説』第六巻の目次を示してたづねたところ、「高明寺」は伽藍は残存しているが仏像などではなく、華頂の「善興寺」は址が少し残存するにすぎず、「降魔塔」は今は破壊されてない。「上方広寺」は

塔」の額のある「祖殿」があり、左に接待室がある。今、接待所に使われている堂は、常盤博士が図示する「金光殿」に当る。今は閉じられて出入りはできないが外に回ってみると、果してそこには「真覚講寺」の額があり

「真經宣講大千界」「覓世宏開不二門」の聯がかかる。前に石階があり、その先には竹林が傾斜して山の下に消えている。もとはここから出入りしたのであり、私たちは裏から入ったことが知られる。が、常盤博士の頃には、すでに閉ざされていた。

「智者塔院」の額のある祖殿には「教判五時化儀化法双詮靈鷲承諸善逝」「仏明六即心作心是并闡支那弘道無二人」の聯があり、

堂に足をふみ入れると、前机の後に、つい最

近造られた真新しい白石の「天台智者大師真

身宝塔」がある。真後ろの壁に智者像の額をかけ、それを中心に一六師の額が列べられて

いる。右すみから順次記すと、幽谿大師像・慈雲大師・淨光大師・元琇大師・広修大師・

道邃大師・左溪大師・法華大師・(智者大師)・章安大師・慧威大師・荊溪大師・行滿大師・

物外大師・清竦大師・宝雲大師・四明大師である。現今の中国天台宗が掲げる祖統といえる。ここには一人の僧が住んでいた。殿前の

中庭に植えられたつげや桂の小枝が、ひときわ激しく降りつける雨にふるえ、濡れそぼっている。

参考資料

△「廬山參觀圖」(廬山管理局宣伝部・江西

人民出版社・一九七九・四)

△「廬山導遊」(江西人民出版社・一九七九・三)

△「天台山詩選」(天台県文化局・一九七九

△「天台山詩選」(天台県文管会版)

△「天台山」(天台文化館・一九七九・一〇)

△「天台山導遊」(浙江人民出版社・一九七九・一)

九・一一)

中國禪宗の発生地と発展地を巡りて

石井修道

蘇州・上海と視察することができた。この二回の中国の訪問では、場所と季節の違いにより非常に異った印象を受けた。プラタナスの

街路樹は、上海・杭州・南京などの大都市では、どこでも熱い太陽の日差しを防ぐみごとな美しき緑のトンネルと化していた。水牛が水浴びをし、大麦や菜種の刈り入れと二期作の水稻の田植え、夜は螢がとびかい、近くで聞くかえるの鳴き声は木造の家屋はないもの

の、日本の田園風景と何らかわらなかつた。街路樹のねむの木やにせあかしやの花をみ、私の近辺にすぐみられる美容柳（未央柳）、しもつけ、一重のくちなし、やまあじさい、アザミ、たけにぐさが花をつけ、松や竹が景観をたのしませてくれた。比較的美味なる水は、すっぽん、かえる、赤犬の肉の料理を一層うまくし、食欲をそそられた。

さらに今回の旅行は学問領域の実地調査の期待で、私を夢中にさせた。日頃、中国禪宗史の研究を心がけている筆者にとって、禪宗の発生地の洪州と禪宗の発展する五山の地方へ足を踏み入れることが期待できるからである。なかでも天童山の第十六代の宏智正覚禪師（一〇九一一一五七）の古天童にあるという卵形の墓塔には、手を触れてみたいと考えていた。持参した「明末清初の天童山と密雲円悟」（駒沢大学仏教学部論集第六号、昭和五〇年一〇月）と「慧照慶預と真歇清了と宏智正覚と」（仏教学部研究紀要第三六号、昭和五三年三月）の二つの論文に、「中国行きのメモを作成したのが今回の論文である」（前者、九四頁）と記しているように、いつか機会があればと思っていたからである。幸いにその地に行くことができたが、時間の制

約もあり、十分に調査しえなかつた。ただ次の機会もあり、また今後多くの方がこの地に行かれると思うので、参考までに今回の報告を記しておこうと思う。私は六月八日、九日に訪ずれた天童山と杭州について分担報告をする。

二、天童山の近況

天童山といえば、道元禪師（一二〇〇一一二五三）のゆかりの地であり、永平・總持寺の両本山の関係者は行かれても、学内ではまだ現地報告を聞いていないので、その方面の詳しい事情を希望する人も多いであろう。しかし論文にも触れたように道元禪師が入宋した頃の寺は、万暦一五（一五八七）年七月二一日の大洪水で廢墟と化し、これを復興したのは臨済宗の傑僧密雲円悟およびその系統の人達である。道元禪師の尋ねられたのは古天童ではなく、現在の天童山と同じ場所ではあるが、当時の様相とは一変している点だけは注意しておく必要があろう。

私共は二台のマイクロバスに分乗し、六月六日、杭州を朝六時に出発した。杭州より天台山を経て、天童山に行き、再び杭州に戻る二泊三日の行程である。私は後車に乗り、こ

の間、寧海出身の案内の馮黎明氏と同乗した。

天台山については池田先生の報告があるから、杭州と天童山との行程を必要最底限に記録しておこう。それは、道元禪師が在宋中に諸山歴訪した行程をも推測したいからである。杭州より天台県まで二二二キロで、杭州より東へまず紹興を経て約百キロ進み、上虞県のすぐ手前の曹娥で南下する。この道は曹娥江にそつており、天台までは、一二六キロとある。この間、前車の池田先生はご存じないのだが、後車は思いがけない事故に遭遇する。朝のアスファルト道路は、この季節だと大麦の脱穀場となる。車の通る路に大麦や麦わらがしきつめあり、上を走る車のタイヤで脱穀する。ところがその麦わらを車体の低い日本製の車がまき込んでしまった。三日間の行程の為、補給のガソリンをつんでいたので、熱したタイヤで発火したらあわや大惨事というハプニングである。

実はこの南下する道路は、柴田道賢氏の『道元の思想』（一七四頁。公論社。昭和五〇年三月）によると、道元禪師が北上された行程と推測している。但し大梅山の位置は誤りで、道元禪師は天台の万年寺より、「道元、

台山より天童にかへる路程に、大梅山護聖寺の旦過に宿する」（嗣書）と記し、「大梅山は慶元府にあり、この山に護聖寺を草創す」（行持上）と明記されるように余姚ではありえない。故に万年寺より台州湾にて象山港を船で行き、寧波へ行く途中に大梅山に立ち寄られたのかもしない。大梅山は「府城の東南七十里に在り」（『大明一統志』卷四六。寧波府の項）とある。しかし天台より杭州湾へは、曹娥江を下る道が一般に利用されていたと思われ、柴田説も一考されよう。私共は思ひぬハブニングで、足で櫓をこぐ曹娥江上の老人にしばしみとれ、やがてその日の宿泊地、台州県より三キロの国清寺へ着いた。

六月七日午后十四時三十分天台を出発し、東へ進み、高規にて臨海・温州への路と離れて北上し、馮氏のふるさと寧海県に十六時過ぎに着き、小休止後、さらに北上し象山港を右手に見て、西店で左折し、この日の宿泊地、寧海縣深甽区の南溪温泉に十七時過ぎに着いた。象山県に近いので、しきりに如淨の師の雪竇智鑑が鄭行山で妖怪や巨鱗と鬪つたことが思い出された。

六月八日、七時半南溪温泉を出発。前日來た路を戻り、西店に八時過ぎについた。朝市

でにぎわい、天台山で食べた枇杷などが売られている。私共も食べた菱白が季節の食用であろうかよく目につく。馮氏はさかんに経済発展のための競争の必要性を車中で述べる。朝市にはわずかな私有地の余剰生産物の売買があることを説明していた。三十分して奉化県に至った。岳林寺や雪竇山のことを聞いたが知らないとのことであった。江口というところでは日本より逆輸入された蘭草の栽培が盛んである。寧奉公路を北上し、寧波に九時半前に着く、寧波では、天封塔を見る。七層のきれいに補修された塔である。天封塔より、建築上すぐれた脚なしの橋と説明される靈橋を渡る。靈橋は奉化江にかかるが、川下すぐに余姚江と合流し、甬江となつて鎮海へ流れている。寧波は慶元府といつた方が親しいが、道元禪師が慶元の船中にとどまつていた嘉定十六（一二二三）年五月に阿育王山の典座が和構を買いに来て問答をかわしたことが『典座教訓』に示されていることはあまりにも有名である。おそらく靈橋を下ることさほど遠くない地点の話であろう。

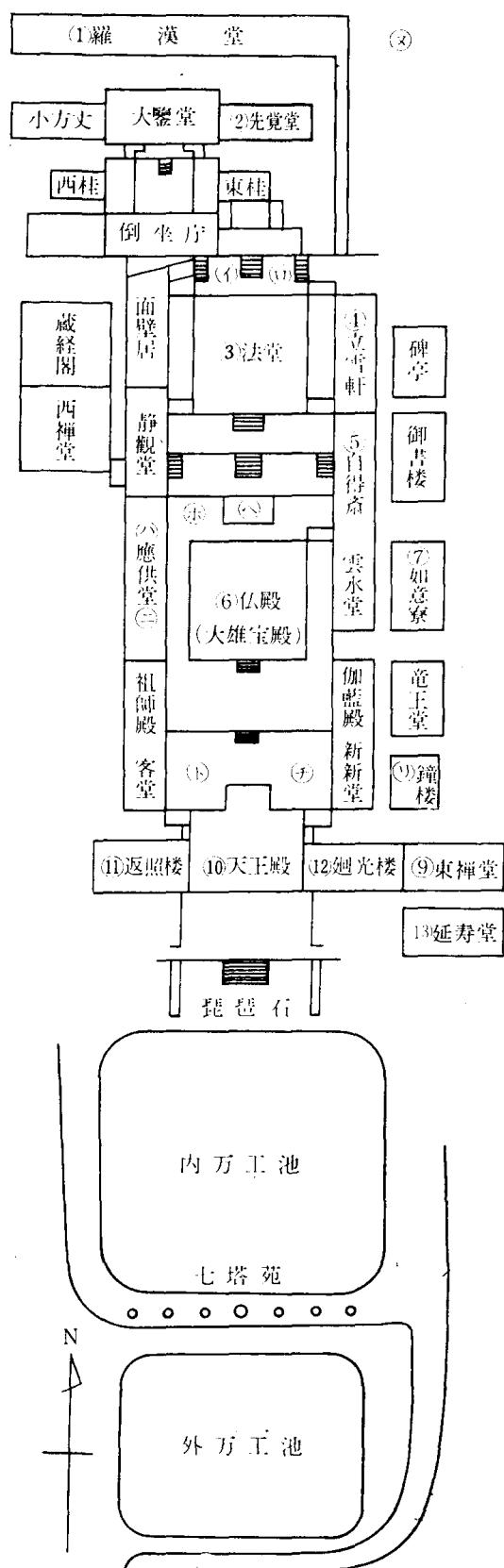
靈橋を渡り、「寧波汽車東站」とあるバス停で右折して、寧奉公路を東に天童山へと向つた。五郷を十時に通過し、やがて育王山と

の別れ道に来る。道路標示には右折すれば、「小白三公里、天童九公里」、直進すれば「郭巨四十公里、大矸十公里」とある。育王山は一・五キロ程で、車中より下の塔がながめられる。

小白・天童へ右折すると、まず天童山の名所の鎮麟塔がみえかくれする。民国九（一九二〇）年、住持文質が重建したと『天童寺統志』（以下統志と略す）にあるが、さらに補修されている。塔の下は、紹興二六（一一二六）年、宏智正覚の推舉で復僧した大慧宗杲（一〇八九一一六三）が育王山に住持した時、謝礼のため天童山を尋ね、宏智がここまで迎え、互いに席を譲り合つたことから名づけられた揖讓亭であろうが、現在は扁額も消され、一般的の展望台に利用されている。この地は峠で、今まで通つて来た小白の方も、これから行こうとする太白の方もみわたせる所である。

帰途に立寄つたが、残念ながら小雨模様で塔には登られなかつた。鎮麟塔は、唐の会昌年間、心鏡藏喫が建立したのにはじまる。塔を過ぎると、人造湖がみえ、鄞縣天童招待所を経て、いよいよ寺域に近づいてくる。寺の背後にある太白峰は標高四百三十メートルで、寺をとりまく環境は深山幽谷という感はしな

天童寺伽藍配置略図



池、その間に七塔苑がある。新しい赤ぬりの上に真白に書かれた「天王殿」の扁額の文字が印象的である。天童寺はまだ修復中であり、今年の十月の一般解放後は一新した天童寺がみられるであろう。今は仏殿や法堂にも扁額はなく、回廊にも作業中の道具類が散在しているのが眼につく。修復は『天童寺統志』や僧侶の記憶によつている。現在の配置は統志とほとんど変化ないことを質問で確かめたので、ここでは配置図を示して、詳しい報告は別の機会としよう。質問の中で道元禅師の師である長翁如淨の世代を確認したが、不明であり、また知る方法もないとのことであつたので付記しておこう。また現在の天童寺を基礎づけた円瑛（一八七八—一九五三）について調査する必要性を感じた。

三、宏智正覚の妙光塔銘に触れて

八日、十一時頃天童寺に到着し、三十分程説明を受けたり、質疑応答の後、奥の羅漢堂の所で自由解散となり調査を始めた。永平寺を知っている人達はみなよく霧雨気が似ていると話していた。確かに国清寺も大伽藍ではあるが、天童山は諸寮があつて、私の見聞した中では最も整つた大伽藍である。この伽藍を

一時間で全部調査することは不可能である。

私は統志の絵図をコピーしていたので、位置を確かめることを中心に伊藤隆寿先生と分担しながら急いで全山を回った。天童山での昼食は予定通り始つていて、私達は少し遅れた。食事をはじめた折に、第一山門まで行って天童寺の「導遊」（案内図）を団員全員に購入してくれた人がいた。その導遊に記されていいる石碑と古天童の文字が目にに入った。質疑の時に古天童は何も残っていないということで、今回行くことはあきらめていた。ただ参考までと思い、古天童までどれ位の距離があるかを聞いたところ、一・五キロ程だといふ。四十分程しかないと想いながらも、鎌田先生が「行ってみよう」と言わされたので、食べるのも忘れてかけ出していた。

古天童への道は、天王殿の前の東側にある樹齢七百年以上ある楠（あるいは道元禅師時代にもあつたかもしれないと思ひながら、）の前を通つて、さらに東の方へ新しい道を進む。しばらく行くと新道は坂道となつて左へ登るが、右側の磚を敷きつめた古道の方へ行く。中峰の麓をまくように行くと菜種の刈り入れが終つた田畠が右手に見え、乳峰の麓に古天童がある。磚や妙光堂を囲む二メートル程の石垣の跡が残つてゐる。しかつて卯塔は発見できなかつた。後の山に息をきらしてはいあがつたが、何もない。また引返し、盤大定博士も発見できなかつたものである。現在は、ここを尋ねれば誰でもこの石碑と石組の一間四方の小屋をみることができる。小屋の右側に卯塔の礎石らしきものがあり、少し下りてまた破壊された礎石がみられた。周囲は巨竹がはえ、石碑の前には刈り取られた菜種があつた。妙光塔碑は宋代の創建であろうか。それ程古いとは思われない。順治四（一六四七）年、費隱通容（一五九三—一六六一）が東谷を恢復して以後重刻されたものかもしれない。しかし私の期待は満され、宏智の石碑と並んで記念の写真に収つた。

碑の表には「渕默雷声」（もとは『莊子』在有篇の語）とあり、裏に「宏智禪師塔銘」と横書きされ、「宋故宏智禪師妙光塔銘有序」と題字がある。左朝請郎直竜國閥知太平州軍州事提挙学事兼管内勸農營田使陽義の周葵（一〇九八—一七四）が撰し、左宣教郎試起居舍人兼玉牒所檢討官兼權中書舍人歴陽の張孝祥（一一三二—一七〇）が書し、左太中大夫権史部尚書同修國史兼侍讀會稽の賀允

中（一〇九〇—一一六八）が題蓋している。

「紹興二十九年七月望日住持嗣祖法姪比丘宗璉立石」も読みとれ、一一五九年、真歇清了下の天童宗璉（一〇九一—一一六二）が立石しているのである。

宏智正覺禪師は、山西省河東道隰県の生れで、參学は湖北省の隨州を中心とするが、三四歳で住持してより、六七歳で示寂するまで次の七ヶ寺に住持している。

- (1) 潘州大聖普照禪寺（一一二四・一〇一）（安徽省）
- (2) 舒州太平興國禪院（一一二七・四〇）（安徽省）
- (3) 江州廬山圓通崇勝禪院（一一二七・一〇一）（江西省）
- (4) 江州能仁禪寺（一一二八・六〇）（江
西省）
- (5) 真州長蘆崇福禪院（一一二八・九〇）
(江蘇省)
- (6) 明州天童山（一一二九・一一〇）（浙
江省）
- (7) 臨安府靈隱寺（一一三八・九〇）（浙
江省）
- (8) 明州天童山（一一三八・一〇一）（浙
江省）
- (9) 明州天童山（一一三八・一〇一）（浙
江省）

寧波に帰り盡橋を渡り、一五時に余姚江にかかる解放橋を過ぎ、ここより二〇四キロの杭州へ向った。蕭甬線の鉄道より北側の道路を走り、慈溪県に十六時二十分、そして鉄道に出合つて曹娥に着いたのが十七時半であつた。南の天台への道を通つたことを思い出した。ながら、紹興を経て杭州に夜遅く到着した。寧波付近では、車中よりひまわり畑をみ、石

およそ三十年間住持した天童山とその墓所に行けただけではなく、今回の旅行は、廬山と江州（九江市）を尋ね、暗やみの中でも能仁寺の塔を探したのは、一生忘れることのできない思い出となるであろう。靈隱寺については後述する。

汗を流しながらやっと出発の時間までに帰つた。天童山を後にする頃は雨もはげしさを増し、再び鎮躰塔の下を通り、育王山に向つた。育王山は、下の塔を見ただけで、中は未だ解放はされてはいないので、横から建物の屋根の部分ながめたにすぎない。正面側も入ることができない様子であった。中国へ行く前に天童山と育王山の位置関係を戦前の日本で作った五十万分の一の地図で調べてもわからなかつたが、こんな点は百聞一見の価値といふものであろう。

棺の墓を探したりした。

四 五山十刹の現況

禅宗の五山十刹とは次のものをいう。

五山

- (1) 径山興聖万寿寺（杭州）
- (2) 阿育王山寶峰広利寺（明州）
- (3) 太白山天童景德寺（明州）
- (4) 北山景德靈隱寺（杭州）
- (5) 南山淨慈報恩光孝寺（杭州）

十刹

- (1) 中天竺山天寧万寿永祚寺（杭州）
- (2) 道場山護聖万寿寺（湖州）
- (3) 蔣山太平興國寺（江蘇省金陵）
- (4) 万寿山報恩光孝寺（江蘇省蘇州）
- (5) 雪竇山資聖寺（明州）
- (6) 江心山竜翔寺（溫州）
- (7) 雪峰山崇聖寺（福建省福州）
- (8) 雲黃山宝林寺（金華）
- (9) 虎丘山雲巖寺（江蘇省蘇州）
- (10) 天台山國清教忠寺（台州）

このうち十一ヶ寺までが浙江省にあり、五山のうち三ヶ寺が杭州にある。十刹では、今回(3)(9)(10)を調査することができた。

六月九日、この一日で景勝地杭州を見るこ

となつた。中国には「上有天堂、下有蘇杭」ということわざがあつて、杭州は蘇州とならび地上の樂園だということになる。午前中は五山の一つ靈隱寺に行つた。靈隱寺の伽藍は早くから整備解放されたところで、中国では仏教の寺といえば靈隱寺をまず第一にあげる人が多いようである。中国寺院の典型がみられるので紹介しよう。入口をすぎて、「東南第一山」と壁に書かれた文字を右手にみながら進むと、南面して天王殿がある。扁額は上に清康熙帝の題字の「雲林禪寺」、下に黃元秀居士の題字の「靈鷲飛來」とあり、四つの柱には聯があり、東より「布袋無双、破顔垂笑。爾等莫待、竜華三会」「峰巒或再有飛來、坐山門老等」「泉水已漸生暖意、放笑臉相迎」「法門不二、大腹能容。來人全憑、念佛一應」とある。天王殿には十五程の額が数えられ、入るとまず頭上に「識海澄圓」「皆大歡喜」、東側に「天涯海國」、西側に「神通廣彼」がみえ、正面に弥勒（布袋は弥勒の化身とする）が祀られ、北側には韋馱天が劍をして正面の仏殿（大雄宝殿）の釈迦を守護しているのである。内部の八本の円柱にも聯があり、韋馱天の周囲も額があつて「大千世界」「仰之彌高」「闍浮淨域」「普濟羣生」「降

伏四魔」「万象依歸」「最勝覺場」「威鎮三洲」「三洲感應」「獨中放光」などとみえる。天王殿とは四天王を祀る殿で、東方の持國天王、南方の增長天王、西方の廣目天王、北方の多聞天王をいい、像の高さは八メートルで、それぞれ琵琶、宝剣、絹索、宝幢を手に持つており、一九三二年に造られたものである。

天王殿を出て北へ進むと広い境内となり、大きな杉の木が両側にあつて、真中の階段を登ると大雄宝殿である。「大雄宝殿」の額の

その上に「妙莊嚴域」の額があり、殿の高さは二三・六メートルで、中に入ると釈迦が祀られ、内部円柱には聯がかかっている。釈迦像は座像の高さが一九・六メートルで、一九五三年に浙江美術学院の教授たちが樟を二十四五本あわせて造つたといわれている。釈迦像の周囲には二十諸天があり、十八羅漢ではないところに特色がある。北側には、觀音菩薩が中央に、善財童子が五十三の善知識に参する像が立体的に彫刻されている。一般に魚藍觀音と呼んでいる。この大雄宝殿の北側には、法堂があつたのであろうが、現在はその跡だけが残つてゐる。靈隱寺には天王殿の前に経幢があり、大雄宝殿の前に經塔も残つてゐるものである。現存のものは、清代に重建し

る。飛来峯には石刻の仏像が多くみられるが、今回足早に通り過ぎた。

玉泉で金魚を見、黃龍洞に立ち寄り、黃大仙洞の洞穴をみたが宗教としての機能などなかつた。門より出て左側に、美しい竹林がみられた。午前中の最後に岳廟の見学である。ここは岳飛（一一〇三一一四一）を祀る。宋岳王墓の門の裏には張俊、万俟卽、秦桧および妻王氏の裸で後手にしばられた銅像が並べられ、現代の中国人がつぱする姿に一瞬、驚ろきを感じた。

昼食後、休み時間を利用して筆や印泥等で有名な西冷印社に行つた。二時より船で西湖を遊覧し、三潭印月の島に下船した。西湖の中の島の中にまた池があり、赤と白の水蓮や黄色のこうほねがみごとに咲いていた。湖上よりまだ解放されていない五山の一つ淨慈寺の黄褐色の屋根をながめ、花港公園で、花期を終えたボタンを多くみた。その後、バスに乗り込み、錢塘江大橋のすぐ近くの六和塔に登つた。五九・八八メートルの高さで外よりみれば八角十三層で、内は七階建である。創建は『宗鏡錄』の著者である法眼宗の永明延寿（九〇四一九七五）で、九七〇年に建立し

たものを重修したと思われる。

杭州の駆け足の見学は終った。五山第一の徑山は、大慧宗杲と関係が深い所であり、残つた遺跡を将来尋ねることにしたい。

五 おわりに

研究報告もしたいが、紙数と日数の制約のため簡単で粗雑な感想となってしまった。今回の中団は中国文化を各分野で研究されている若い人達が多かったため、私にとっては大変有意義な旅行となつた。

特に東京外国语大学の中国語の南方の方言を研究されている中島幹起先生の話は興味深かつた。江西省の南昌より廬山までのバス旅行中に聞いた話では、言語学では、江西省には南北に貫く贛語の系統があり、浙江省の吳語と湖南省の湘語を分断しているということである。吳語と湘語は近い関係にあって、贛語が兩語にはさまれているといわれる。そして贛語は洛陽長安とも結びつき、南は廣東さらに福建との交流が考えられると聞いた。しかも江西省は今のような漢民族中心の社会構造でなくて少数民族がもつと多くいたのではないか、というような内容であった。

洪州（南昌）は南宗禪の発生地であり、六

祖慧能は広東省の新州より大庾嶺を通り黄梅へ行く。時代は下るが大慧宗杲は梅州から慧能と同じように北上し贛江に出て、一度長沙の方へは行くけれども九江の能仁寺に立ち寄る。この南北のルートは注目すべきであり、贛江の果す役割は大変大きなものがあるのではないかと考えられてくる。馬祖下の廬山での活躍も、廬山の南の星子県を中心としている

ので、海上交通の鄱陽湖を考えねばなるまい。残念ながら九江より黄梅への長江渡りはでしかなかつたけれども、二年後に完成する橋をいつか渡りたい。昨年とは異つた今回の江南の訪中の旅は、私に「水上の道」を考えさせ研究の上に何かプラスになればと思いつつ、研究の大好きな宝物を残してくれた。今後、禪宗史の訪中の旅は、私に「水上の道」を考えさせ研究の上に何かプラスになればと思いつつ、今回の分担報告としたい。

南京・蘇州・上海の文化史蹟

伊 藤 隆 寿

六月十日午前八時、杭州発北京行の列車で南京に向う。約八時間。鎮江通過の際、進行方向右側に、はるか金山江天寺塔を望む。焦山定慧寺と並ぶ唐宋以来の名刹。

ところ大きい。反面、日中戦争のイメージも強く、幼少の頃目にした雑誌（戦記もの）のタイトルと絵を思い出さずにはおれなかつた。当然、破壊が繰返されたであろうことが予想された。しかし、かつての大城壁の一部が、今も残されていることによつて、その雄大な歴史をしのぶことができる。

南京は、古く金陵・建業・建康などと呼ばれて、西安と肩をならべる江南随一の古都である。中国南北朝の仏教の一中心地でもあつた。我々にとっては、ひそかに期待を寄せる

め、市内の中心街を通り、午前中は、明故宮跡、紫金山、鶴鳴寺跡を廻る。

東晉以来、都城の位置は、ほぼ玄武湖の真南であったが、明朝の第一代皇帝朱元璋（太祖）は、玄武湖の東南にあった燕雀湖を埋立て建都した。現在、明故宮遺跡として、中山東路に面する午朝門と門内の五竜橋、古の建造物の大きさを窺わせる礎石のみが存する。

中山東路を、さらに東に進むと中山門（旧の朝陽門）に至る。この附近の城壁も残されていいる。中山門を通過して城外に出ると、紫金山にかかる。

紫金山は、古くは多く鐘山と称されていて、南北朝時代には、定林寺、靈味寺、靈根寺、靈曜寺、興皇寺、道林寺、延賢寺、宋熙寺、開善寺、草堂寺、大愛敬寺等、七十ヶ寺があつたとされるが、現在、開善寺のみが、わずかにその跡を留めているに過ぎない。紫金山には、開善寺の後身たる靈谷寺、中山陵、明孝陵、天文台等がある。山に向って中央が中山陵、その右（東）が靈谷寺、左が明孝陵、さらに左手の山頂（古く鐘山龍尾といふ）に紫金山天文台がある。

明孝陵は、中山門を出て少し山道を登り、中山陵に至る途中にある。陵碑、参道両側に

並ぶ獅子・駱駝・象・馬の石像や、武官文官の像は、常盤先生の『中國文化史蹟』（十）の報告と、ほとんど変らないと思われる。た

だ道路が整備され、参道には植樹され、風景は一変しているであろう。また報告の写真（卷十の図版第六十八）に明瞭な陵碑の落書等は、今は黒々と墨で消されている。さらに大紅門の損壊部を現在修理中であった。また陵墓に至る最後の直線の参道も、さらに整備される様子である。時間の都合で、陵墓そのものは見学できなかつたが、その地こそ、昔の開善寺があつた場所であり、それは、独龍阜の麓に当る。独龍阜は鐘山の麓にある小高い丘であり、明孝陵の正しく背後にあつて、参道から真直ぐ望むことができた。定林寺の前岡と称されるから、定林寺も付近にあつたものであろう。

中山陵は、明孝陵の前を過ぎて少し東に行つたところ。孫中山（孫文）を祀る。紫金山の山腹の正に中心に位置する。三十キロ四方という広大な陵園で、博愛と書かれた第一門たる牌楼を通り、ゆるやかな広い並木のスロープを登ると、三つのアーチのある第二門（牌坊）があり、次に碑亭があり、総じて三段を下り参道を進むと、右手の林の中に、石碑の龜趺のみが残されている。この龜趺が、

にいたる。靈堂内には孫文の大理石の座像があり、その奥に墓室がある。

靈谷寺 中山陵からさらに東に進むと靈谷

寺である。現在は、靈谷公園として紫金山でも最も美しい景勝の地とされている。由来は、梁の天監十三年（五一四）に武帝が誌公（宝誌）のために鐘山の獨龍岡に塔寺を建立し、開善精舎と名づけたのがその最初とされる。

梁三大法師の一人である智藏を勅して住ませたので、開善寺の名は仏教史上名高い。この寺を始めとする鐘山の諸寺は以後興廢し、開善寺も、唐の乾符中（八七四—八七九）に

宝公院と改称され、宋の開宝中（九六八—九七五）に開善道場となり、趙宋の太平興國五年（九八〇）には、王安石が諸小刹を合して太平興國寺と改めた時、開善寺も含められた。そして明代に至り、太祖孝陵をここに築くために、寺を東方の現在地に移し、名を靈谷寺に改めたとされる。

外門を入り、しばらく進むと階段があり、その上が第二門の牌樓である。この場所は、旧の天王殿跡であろうか。そこから無梁殿が見えるが、その間は、かなりの空間である。階段を下り参道を進むと、右手の林の中に、石碑の龜趺のみが残されている。この龜趺が、

常盤先生報告のものと同一とすれば、参道の第二の石段の上には、大雄宝殿があつたことになる。今は何もない。第二門と無梁殿との空間が広すぎるようを感じるのは、そのせいかも知れない。「無梁殿」は、純磚造アーチ・ヴォールト構造の典型とされる堂々とした建物である。名のごとく一本もハリのない明代初期の建築である。古くは、無量寿仏が安置されていたので、無量殿と称した。アーチ型の入口は五ヶ所、内部は前中後の三に区切られ、中室には基壇があり、かつては仏像等が祀られてあつたという。無梁殿の前から右手へ行き公道を横断したところに「靈谷寺」の扁額を掲げた山門がある。ここが、現在の寺の中心である。内には大雄宝殿と玄奘法師記念堂、鑑真堂等があるはずで、特に玄奘堂には、もと攝山棲霞寺にあつた十三層の黄金塔があり、その中に玄奘の遺骨が奉安されているとされる。しかし残念ながら今回は拝観できなかつた。逆戻りして、無梁殿の先は円型の広場で、前方の中空に靈谷塔が見えてくる。塔の手前に松風閣という休息所がある。その左手の林の中に、コンクリート製の「誌公塔」があり、正面に「三絶碑」が塗り込められている。わずかに三絶の名が確認される

程度だが、近代の複製である。「靈谷塔」は近年の建築で、八角九層である。塔上からの眺望はすばらしく、紫金山の南麓、南京市が一望できる。西に中山陵、獨龍阜、天文台が見え、その手前の重層褐色の屋根は藏經樓のことであるが、建物は近年のもので文物資料館に使用しているようなことであつた。南々西の方角には、牛首山、祖堂山があるはずであるが、霞がかかり良く見えなかつた。

靈谷寺をあとにして、北東の太平門より城内に入り鷄鳴寺跡に寄る。何もありませんよ、との言葉通りであつた。この地は、鷄籠山であり梁武創建の同泰寺の故趾とされる。玄武湖に近い城北の丘陵上である。現在は、鷄鳴寺という地名として残つてゐるのみ。もとの伽藍の地は、工場と住居となり、現在は使用されていない石段と散乱する礎石が、わずかに故趾たるを推察せしめるに過ぎない。鷄鳴寺跡と道路を挟んで、明代の国子藍（国立学校）跡がある。今は南京市革命委員会の建物。

案内の王氏の計らいで予定より一時間早く午後一時にホテルを出発し、清涼寺、貢院、雨花台、棲霞寺、梁墓等を見学。

清涼寺は、市の西辺、秦淮河に近い石頭城

の上、清涼山にある。清涼山は道路で二分されており、西側の方には草場（火葬場）があつて、南京の人達にとつては忌み嫌う所のこと。寺は、法眼宗の祖、法眼文益の住したことで、仏教史上重要な地位を占める。しかし、残念ながら、現在は廃虚同然であり、修復に着手したばかりであつた。道路に面して三つのアーチ型の入口のある山門があつて、これだけが先に建てられたらしい。中央上部に「清涼山」と刻まれ、左右に「六朝勝蹟」と刻す。門に入った正面は、なだらかなスロープが広がり雑草地。左手に文物資料館が建っていた。はじめ、寺の遺蹟は、もはや何もないので、と疑つたが、右手の傾斜地の上に、伽藍跡があつた。修復のために不要の建物を取壊し、整地し、古い木材、レンガ、瓦等が積まっていた。常盤先生の報告では、僅に一殿を有するのみ、とされる。現在、周囲に丸太による枠組が施されている一番上方の大きな伽藍であろうか。しかし、かつては、中央一列に三乃至四の建物と、左右にも建造物が軒を接していたことが推察される。山門から右へ登る参道（小径ではじめ気がつかなかつた）があり、通用門？を入れると、今作

な彫刻が施されており、これは伽藍の一であらう。その上方は階段で結ばれ、ヒナ壇式に伽藍が並んでいたことを窺わしめる。修復中の大殿の手前左側に二階建の新しい建物があり、人影が見えていたから作業か管理のために使用されているのであらうか。修理中の大殿は、背後の樹木が透けて見える状態で、屋根と柱のみ。石段や石積の荒れ果てた姿は、何とも言いようがない。しかし数年後は、どうに生れ變るであろうか。

清涼山をあとにし、莫愁湖公園に近い、夫子廟の故地と貢院に立寄る。夫子廟は、もと士試験所の一部が残るのみか。貢院は明代の貢士試験所で、ここに試験に合格すれば中央政府に推挙される仕組であった。現在、入口に当る三層の楼が残され、第二層に「明達樓」の扁額を掲げる。漢方病院になつてゐる由。前の通りは貢院街と称し、かなりの賑いを見せていた。

雨花台は、中華門（聚寶門）を出て、鉄道の線路を渡つた先の聚寶山（梅岡）の上である。この山中には、梁代に光宅寺、蕭帝寺、高座寺、長干寺等があり、紫金山に次いで寺院が集中していたところである。雨花台の名は、梁の光宅寺法雲が、この山頂に座して法

華經を講じたところ、天花が雨のように降つた、という伝説に因む。現在は、革命烈士の陵園となつており、南面して「死難烈士万歳」という金文字の記念碑が建つ。参道横では、付近で採れる雨花石（五色の小石）を売つてゐる。寺院跡があるとのことであつたが時間の関係で尋ねることが出来ず残念であった。

棲霞寺 雨花台から市内を北上して太平門を出て、いよいよ郊外の棲霞山（摶山）に向う。紫金山の東北方にあり約三十キロのところ。バスで一時間弱である。途中染墓等散在するが、帰路停車することにして通過。甘家巷を過ぎたあたりから前方に棲霞山が見えてくる。三つの山容が現われて來るが、右が竜山、左が虎山で、中央の山頂に通信塔？の見える奥まつた山が中峰である。公道からわずか左に入ると門前に至る。境内の外壁に接して、参道右側に広い駐車場を設け、その隣りは学校である。

棲霞山は、唐の嘉祥大師吉藏の大成した三論宗の発祥地として仏教史上名高い。南齊の居士明僧紹によって開かれ、そこに法度禪師が黃龍より来つて無量寿経を講じた。これに因み、齊の永明七年（四八九）、明僧紹は本宅を捨てて寺とした。それが棲霞寺の起原である。

ある。その後、摶山三論宗の第一祖とされる僧朗が遠く遼東から來り、三論の大義を唱えるや、梁の武帝聞き及び、天藍十一年（五一）に、中寺僧懷や靈根寺慧令等十僧を勅遣して諮詢せしめたといふ。弟子に僧詮があり、やはり摶山に住したので、吉藏等は山中正しく伝えられたもの、との意味で、摶嶺相承ともいふ。僧詮には、詮公の四友と称される四人の弟子があり、僧詮の寂後、慧布は棲霞寺に留まり、法朗は鐘山の興皇寺に、慧勇は禪衆寺に、慧（智）弁は聚寶山の長干寺に各々住して三論を弘めた。特に慧布は、棲霞寺に初めて禪堂を建ててゐる。僧詮のことを摶山止觀寺の僧詮ともいふ。摶山に別に止觀寺という寺があつたものか確認し得ないが、慧布の禪堂建立を見ると、三論と禪とが結びつく端緒は、僧詮が開き、慧布や、同門で茅山に入った明（冕）法師（牛頭法融の師）が、さらに確固たるものにしたと言うべきであろう。現在、棲霞寺は修復中である。建物は、弥勒殿、毘盧宝殿、藏經樓、方丈、祖師堂、斎堂等があり、一部完成している。他に明徵君碑、舍利塔、千仏巖等がある。その他

は、今回の調査では不明。

外門に入った正面に、棲霞山遊覧図があり、その右側に、棲霞山簡介と遊覧須知の看板が立つ。今年に入って建てられたもの。そこを左方に時計廻りに進むと左手に池があり、内に亭（東屋）がある。正面に伽藍が望まれる。中峰の麓で、西面して建つ。伽藍までは、かなりの空間が開け、手前に半月形の白蓮池がある。丁度白の水蓮が開花中。池の向うは芝敷で、正面に壁がレンガ色に塗られた山門（弥勒殿）が望まる。アーチ型の三つの入口があるが、朱色の扉が閉じられている。中央アーチ上に棲霞古寺とあり、右に六朝勝蹟、左に千仏名藍とある。さらに左右の壁には、右から阿弥・陀仏と藍色で書かれている。この建物の前方左側に碑亭があり、その中に「明徵君碑」が保存されている。碑亭は一九七六年三月に建てられたもの。先の明僧紹の碑である。唐高宗の上元三年（六七六）の建立。碑文は御製。唐初の最も精美な手法を代表するものと評される。ただし碑亭に入れなかつた。碑亭の後から、弥勒殿の左手の方に迂廻して進むと通用門がある（伽藍は屏で囲まる）。道の側にはレンガや石材が積まれ、正に修復中なることが知られる。通用

門の扉には「通告」として、外部者の立入禁止の旨張出している。今年二月十日の日付で、未解放なることの明示であるが、今回は特別の配慮により内部を拝観することが出来た。住職二人が出迎えてくれた。説明案内をして下さった方は、養真法師で六十六歳という。住職は、宏量方丈（六十八歳）の由。現在は臨済宗を標す。約二十人の僧がいるとのこと。勤行は、朝は大悲呪を、夕は阿弥陀経を読誦する。なお修復を完了した際には、住僧を募集する予定と話していた。

伽藍は、清の光緒年間に建てられたもので、それを修理しているわけである。通用門を入ったところは、「毘盧殿」の前庭である。この建物は、軒の四隅が上にそりかえっている壯麗なもので、江南地方特有の伽藍である。前庭中央に銅製の四角い大香炉がある。正面 上部に棲霞寺と大きく刻され、その下に般若心經を陽刻してある。清代のもの。毘盧殿は修復が完了した唯一の建物である。金文字で毘盧宝殿と刻した朱の扁額を掲げる。大雄宝殿ではなく、なぜ毘盧殿なのか由来は聞けなかつたが、華嚴宗の影響があつたのか、もつと古く、僧朗以来の華嚴經講讀によるものであろうか。殿内正面に、毘盧舍那仏の座像、

右が大梵天王、左が帝釈天の立像を安置する。左右の壁面には、諸天が各々十天づつ祀られている。また左右の奥には明代のものという金箔の大きな厨子が置かれ、右に六朝仏（阿弥陀仏）、左に唐仏（観音）が安置される。共に石仏座像で、六朝仏は頭部のみ古いもので下部補修、唐仏は貞觀代のものといい、右と逆に頭部が新造という。しかし共に美しい仏像である。厨子の内側には阿弥陀來迎図が陽刻され、全面金箔が施されている。台座は新しいもの。本尊仏の背面上は、漂海觀音の立体図である。寺により名称を異にするが、天台山の南海觀音、天童山の海東觀音と軌を一にする。毘盧殿の背後には急な階段がある。「方丈」の額を掲げた門がある。門の両側に聯があり、右に獅子窟中無異獸、左に象王行處絶孤踪と篆書されている。その門から内に入れず、右手の廻廊より内部に入る。廻廊には雲板と梯が掛けてあつた。先の方丈門の前は小庭があり、すぐ高い石積である。その上に「藏經樓」が建つ。重層で内に入れない。經典類を保存するのか否かも不明。高窓から室内を覗き見たところ、客室（応接室）となつていて、椅子、机等の調度品が整えられてあつた。正面の壁上部に、正

法眼藏の扁額、その下に達摩の掛図があり、東土初祖と書かれている。清代の鳥瞰図によれば、藏經樓の背後に禪堂があることになつてゐるが、それは確認出来なかつた。ただ藏經樓の右には「念佛堂」があり、そのうしろは僧房であろうか。左にも建物があるが未詳。

毘盧殿から上方は以上のごとくで、下方には、毘盧殿に対して外からは山門に見えた「弥勒殿」がある。中には布袋（弥勒）像と韋馱天を安置する、共に小振り。廣場側の出入口上部に弥勒殿の額があつた。弥勒殿と毘盧殿との間、左右に対置して「齋堂」と「祖堂」がある。共に修復中で、内には何もない。ただ祖堂には、いすれ歴住祖師の像を安置するということで、中央に、その歴住の僧名を書いた牌が置いてあつた。第一祖法度、第二祖智顥等としており、初期の列次は何に依つたものか不明。あるいは『金陵梵刹志』であろうか。

三十分程で通用門を出る。充分観察出来なかつたのが心残りであった。次に伽藍の南側にある舍利塔と千仏巖に移る。伽藍を中心として南北両側に山道と小渓が通じ、共に山頂まで続くようである。広場から南の山道を少

し行くと、左手に「舍利塔」がある。丁度念佛堂の背後で千仏巖の左手前に当る。舍利塔の起原は、隋文帝にまで溯るが、現塔は、唐（九三七—九七五）時代に再興されたもので、八角五層の石塔である。近年修復が加えられ、新たに高さ一メートル程の石造欄干を廻らした立派な基壇が設けられ、その上に、綺麗に掃除された古塔が建つ。頂部の五輪等、所々補修されているが、ほぼ大正末年に常盤先生訪問の際の状態を保つてゐる。ただし残念なことは、周囲に鉄柵がめぐらされて側に近寄れなかつたことである。従つて基壇の各面の羽目に彫刻された釈迦八相図等を詳細に観察できなかつた。「千仏巖」は、岩山を利用して多数の仏龕があるにより名付けられたものであろう。これは、明僧紹の遺志を継いで、第二子仲璋が法度と協力して開いたものである。かなり風化し、また補修され、さらに剥落する状況にあつて、文革中であつたが、仏菩薩の頭部欠損するもの多い。しかし

多くの古蹟、殿堂があつたことが知られるが、今回、山上に登る余裕はなかつた。

梁墓 摂山を後にして南京市内への帰途、甘家巷小学校内の蕭秀墓、棲霞操車場の見える公道（十月村のあたり）の両側の水田中に散在する蕭恢墓、蕭憺墓、蕭景墓の遺跡（参道の石獸と碑）を見学撮影する。それぞれに一九七六年十二月に建てられた文物指定の碑がある。蕭景墓のみ、公道の南側、操車場の蒸氣機関車の見える方向にあり、その石獸に至る農道の小さな橋には、幸福橋と刻してあつた。その反対側には毛沢東の像が立つ。

蘇 州

小規模ながら、江南では珍らしい存在で、年代的には北魏の時代、雲岡の石窟が成つた頃に當り、様式もほぼ同型に属すとされるから、貴重な遺蹟である。千仏巖の中央に南面して大仏龕があり、明代修築の石造重閣で覆

虎丘は、太湖と蘇州の間に連なる丘陵の一

つで、街の西北約三キロ程のところにある。

元来、吳王闔閭（在位前五一四—四九六）の墓地である。雲巖寺は、竺法汰の弟子道一を開基とする。現在、虎丘公園として整備されている。山塘河に面して第一門があるというが、今は、橋を渡って、四周をめぐる内堀のところまでバスが入るから、第一門は通らない。もと舟で河から登つたのである。アーチ型の石橋を渡つて第二門に至る。黄壁で元代の建築。梁が二つの部分に分れている珍らしいもので、「断梁殿」と称される。主要なる遺蹟は、生公講台、点頭石、劍池、雲巖寺塔、大雄宝殿であろう。

第二門を入ると左右に憨々泉、試劍石、枕石、真娘墓があり、千人石と呼ばれる巨岩台地に至る。そこに蓮池があり、中に「点頭石」。その池の左手に「生公講台」、劍池への入口が続く。上方を仰ぐと大塔が望まれる。美しい景観である。生公とは竺道生で、開基の竺道一と同門である。彼が頓悟成仏を唱え、闡提成仏を主張した時、学界は認めず彼を擯斥したが、一時この虎丘山に来て、涅槃經を講説した。その時、彼の講義に岩石すら点頭したというのである。『高僧伝』では、旬日中に学徒数百という。「劍池」は、吳王

の墓室に通ずる入口に当るそうで、近年発掘調査され確認されたものの、掘鑿することにより、その山上に立つ大塔が、いよいよ傾き倒壊する恐れありということで、中止されていることである。土砂降りの雨で、水面に散る雨滴のアトが印象的であった。「雲巖寺塔」は、そこから石段を登つた山頂にある。八角七層の塔で、後周末（九五九）の建造とされる。最上部等かなり補修が加えられているが、十五度程傾いており登れない。説明者はピサの斜塔に比する。少し離れた周囲に、傾斜度を測定するためと思われる基準点が設定されていた。この寺には、伽藍として残るのは「大雄宝殿」のみである。釈迦如來と迦葉・阿難の三尊、左右に十八羅漢といふのは一般の形である。建造物は他にも多く存在する。

寒山寺は、市街西郊、大運河に接する位置にある。門前には石垣を積んだ水路が通り、「楓橋」と称される美しい大鼓橋が架つている。現在は江村橋と呼ばれ、一九七八年十月に文物保存単位に指定されている。この寺が我国において、つとに有名なのは、寒山拾得の石刻と、張繼の楓橋夜泊の詩碑が存するに依る。伽藍は弥勒殿、大雄宝殿、藏經閣、五

百羅漢堂（二棟）、寒山堂、鐘樓がある。共に近年の修築で小規模。「大雄殿」の本尊背面に寒拾像の石刻が塗り込められている。そして右手に日本製の梵鐘があり、これは、伊藤博文の寄進したもの、銘に明らかである。

「藏經閣」には正面に千手觀音像の石刻があり、左右の壁一面に金剛般若經等の石刻經が塗りこめられている。「寒山堂」には清代の作という寒山拾得像が祀られている。

玄妙觀は、觀前街（蘇州の繁華街）にある道教寺院跡である。唐代に開元宮といい、宋に天慶觀と呼ばれた。今の名は、元の至元元年（一三三八）に改められたもの。現在、「三清殿」と、その左手にやや離れて（商店のうしろ）、「雷王殿」の建物が残り、三清殿の前方にある、本来入口の建物（もと天王像があつたという）は、友宜商店とデパートに使用されている。三清殿の中は見ることが出来ない。屋根等かなり損傷し、特に修復のあとは見えなかつた。

翌十三日の朝、網師園と北寺塔を訪れた。

北寺塔は、蘇州駅に近い東西に走る北寺塔路と南北の人民路の交差点に位置する。人民路を北上すると正面に見えてくる。古の通玄寺の故趾とされ、吳越時代は報恩寺と称され

た。昨年、塔のみ解放されたそうで、他の建物の中で、一殿のみ現在修復中である。先ず、北塔勝蹟と書かれた牌楼があり、それを通るとすぐ山門である。塔までは広い庭になつており、盆栽等も置かれ、よく整備されている。塔は、後梁（九〇八—九二三）に十一層のものが造建されたが、その後兵火に倒され、紹興年間（一一三一—一六二）に重建されたのが現塔である。勿論大博塔であるが、外部は木造にて覆われている。高さ七十六メートル。七層まで登ることが出来る。塔の上からは蘇州市内が一望に出来、塔の後方に、寺院趾と思しき建物が二棟並ぶ。また東側に修復中の大殿がある。話では観音殿のこと。側まで行ってみようと、小路を入つてみたが、民家に囲まれて近寄れなかつた。

上海

北寺塔から駅に向い、午前十時二十二分発の列車で、十二日ぶりに上海に戻る。蘇州からは約一時間である。上海には有名な玉仏寺があり大抵は訪問すると聞くが、近代（一九一八）の建立であり今回は除かれた。そして午後、未解放を承知で、竜華寺を訪問した。竜華寺は、上海市の南郊、竜華公園の東に隣接する。ここには上海唯一の八角七層の木

造の塔がある。諸堂と塔とは道路によつて分断されている。道路に添つて竹編の屏がめぐらしく、一応寺域には入らないようになつてゐる。しかし正面は作業の車が出入できるよう開けてあり、そこから山門（天王殿）が見える。丁度トラックが入つたところで、何やら制止していたが、我々は境内に駆込んだ。山門と道路の間は、空地で整地も充分でない状態であつた。諸堂の周囲は、黄壁の屏がめぐり、山門も右横の通用門も閉じられて、全く中には入れない。しかし、黄壁は新しく、屏の上部か見らえる建造物の屋根も美しく、建物自身は、完全に補修がなされている様子であった。常盤先生が報告されたとほぼ同じ配置で残されていると思われる。説明では、天王殿、大雄宝殿、方丈等が並び、天王殿と大雄殿の間左右にある三層の建物は、鼓樓と鐘樓であるといふ。いずれ解放されるのであろう。塔には登れるのか否か確認せずに終つた。

以上、多分に私見が加わつたかも知れないが、昭和五十五年六月の時点では見聞したことなどをなぞつてみた。今回の訪問先は、完全に修復されたところよりは、修復中か、未着手の方があつた。しかし、近年の文物に対する

中国の力の入れようは充分に感じられ、あと数年を経て、再び訪れた際には、面目一新しているであろう。なお、旅行に当つての参考書を次に掲げておきたい。

常盤大定、関野貞「中国文化史蹟」（十三巻）同解説（上下）、及び「支那仏教史蹟踏査記」、ナジエール版「中国旅行百科」（筑摩）「中国仏教の旅」（美之美）、「中国の旅」（講談社）その外、地方志及び寺山志等。（昭和五十五年七月記）